

二十韻

「宗祇の夢」の巻

捌

本屋

良子

雪富士や宗祇の夢はなほつづく

本屋

良子

冬晴のもと集ふ人々

水口

英男

威勢よくノズルはミスト吹きあげて

林

転石

流木に掛け水夫は一服

木之下

みなみ

ウ

大寺を望む浜辺に月の影

英

初紅葉めで君の髪愛で

良

英

菊の宴酔うたあなたは帰らざる

石

良

軒のてるてる坊主さびし気

石

良

鳩の糞ぽとりと肩にだうしやう

石

良

ガソリン高に頭悩ませ

英

良

ナオ

王様はペルシャの姫に貢いでる

石

み

座敷童があかんべえして

英

良

暗がりに誘ひ出さむと時は今

石

み

抱きつく彼に抱かれてをり

石

み

口紅を月の露台に塗り直す

石

み

鰻かば焼き岡持に提げ

石

み

ナウ

絵の中に心を求め飽きもせず

英

良

母と斉唱早春の歌

石

良

ダムサイト花トンネルを園児行く

石

み

田打のあとの楽し甜酒(たむぎけ)

石

み

令和三年十一月二十一日

於 裾野市桃園集会所